

**【喘息/嘔吐】 病弱なくせに無理に笑うクラスメイトを
気にかけていたら、いつの間にか好きになっちゃう話。**

目次

【体育後の喘息発作～吸入】

→p2～

【体調不良を我慢～保健室で嘔吐、介抱】

→p13～

【デート(?)の帰りに喘息発作～自宅のベッドで看病】

→p26～

「全然大丈夫そうには見えないけど」

龍星はそう言いながら、凧の隣にしゃがみ込んだ。

鞆はどこだ、と視線を巡らせると、少し離れた床に凧の荷物が投げ出されるように置かれていた。

(確か……小さなポーチに入れてたよな……)

普段、凧がお守りのように持ち歩いているポーチの中に、見覚えのある吸入器。

「……これだろ？」

「あ……うん……ごめっ……」

「無理に話さなくていい。ほら、早く使って」

龍星が吸入器を差し出すと、凧は震える手でそれを受け取る。ふと彼の首筋を見ると、喉元から汗が伝い、胸を통って体操着に吸い込まれていく。

その様子を見つめることになんともなく背徳感が生まれた龍星は、はっと目をそらした。

数秒経ったが、吸入できた気配がない。様子を見ると、うまく力が入らないのか、指先が何度も滑り、ボタンを上手く押せないようだった。

「……貸して」

凧の手からそっと吸入器を取る。

使い方はテレビで見聞きした程度の知識しかなかったが、慌てず、凧の口元にそれを近づけた。

「お前の呼吸に合わせて押すから、苦しいだろうけど……なるべく深く呼吸して」

「……っ」

「息、ゆっくり吐けるか？」

「……うん」

いつもの軽口を叩く余裕もないくらい、今は苦しいのだろう。素

クラスメイトたちが不思議そうにこちらを見る中、龍星は凧の腕をそっと引いて教室を後にする。

「次の授業、休むって先生に言っとくから」

「は……？ なっ、待ってよ……なんでそんな勝手に……」

「気付かないとでも思ったか？ まさか……自覚なし？ 顔、真っ青だぞ」

凧は意表を突かれたような顔をした。周囲を気にしてか、小声で反論してきた。

「別にっ……このくらい平気……」

「全然平気そうには見えないけど？ ほら、反論する元気があるなら、とっとと行くぞ」

龍星は有無を言わず、凧の腕を引き廊下を進む。手を引かれてとぼとぼと歩きながら、凧はどこか困惑した様子で龍星の顔を見上げている。

「……なんで、わかったの」

「何が」

「……具合悪いこと。……俺、誰にも言ってないのに……」

龍星は、少し考えてから口を開いた。

「なんとなく……いや、正直言うと、この前トイレで苦しそうにしてるお前見た時から、なんていうか……お前のこと、ちゃんと見るようになった」

凧は驚いたように目を見開いた。それから、恥ずかしそうに視線を落とす。

「そんなんっ……勝手に見るなよ……」

保健室に着くと、扉には「不在」の札がかかっていた。ノックをしても返事はなく、龍星は一瞬迷ったが、鍵は開いていたので、ひとまずベッドで休ませようと、扉を開けた。

「先生、いないけど……まあ、ベッドで休んどけ」

「え……いいの、勝手に入っちゃって……」

「具合悪いやつに無理させる方が問題だろ」

龍星はそう言って、奥にあるベッドのカーテンを開けた。凧の背中にそっと手を添えて、ベッドの縁に座らせる。

「靴、脱げるか？ 横になった方がいいだろ？」

「……うん」

凧は素直に靴を脱ぎ、ゆっくりとベッドに横たわった。かけ布団を軽く引き上げて、その肩口までかけてやると、凧はくすぐったそうに小さく笑った。

「なんか、龍星って世話焼きだよね」

「うるさい、黙って寝てろ」

そう言った直後だった。凧の表情が、ふっと強張った。

「……凧？」

「……っ……ごめ、ちょっと……待って……」

口元を手で覆いながら、凧はゆらりと上半身を起こし、顔をしかめた。

「……風？」

「っ……ごめっ……ちょっと、息が……」

その声はすでに震えていた。額にはじっとりと汗が滲み、顔色が白くなっていく。

龍星はすぐに風の荷物を持ち、空いた手で肩を支えた。

「吸入器、持ってきてるか」

「……ヒュッ……はっ……鞆のっ、中……ハア……」

龍星は鞆から吸入器を取り出し、すぐに口元に近づける。

「息、吐いて……吸って」

「……っ……ヒュッ……ハッ……んッ……」

風は必死にそれに従おうとしたが、上手く呼吸が整わない。

「ゆっくりでいい……俺が合わせるから、しやすいように呼吸して……」

「ヒュー……はっ……う、ん……ヒュッ……」

凧の呼吸に合わせて吸入させたが、呼吸は一向に落ち着かない。
それどころか、肩の上下がさらに激しくなっていく。

「……っ……ヒュッ……りゅう、せ……」

掠れた声と同時に、凧は膝から崩れ落ちた。龍星はとっさにその
体を支える。

(これは……まずいんじゃない……)

不安と恐怖で心臓が冷たくなる。

「ヒュッ……よ、横に……なりたい……かもっ……休めば……ヒュッ……
よくなっ……ケッ……ヒュッ……」

「っ……！　もう喋らなくていい……」

青ざめた凧の顔にかかる前髪をよけ、視線を合わせる。

「俺の家、この先だから。すぐに連れていく。もう少しだけ、我慢

「……俺だけにして」

声は小さく掠れていて、きっと情けなかったと思う。

凧はまだ呼吸が整いきっていないせいか、ぼんやりとした顔で龍星を見上げた。

「え……？」

二人の視線が絡まり、部屋がしんと静まる。

「……俺が、お前を好きって言ったら、気持ち悪いか？」

「っ……お、俺を……？」

わかりやすく、まん丸な瞳を揺らし、不安に揺れる表情に、龍星は胸が苦しくなる。

(言わないほうが、きっとお互い傷つかずに済む……でも……)

一度自覚してしまったら、もう止まらない。抑え込むにはあまり

にも大きくて、熱い想い。

この感情を隠したまま、これまでと変わらず凧と過ごすだなんて、不器用な俺にはきっとできないだろう。

「お前というのとドキドキして、何も手につかなくなって……すげえ苦しいのに、もっと一緒にいたいって思っちゃう。この感情、なんて呼べばいいんだろうな……」

「なっ、急に……何言って……」

「……」

「っ……り、龍星っ……？ お、俺……」

「……ごめん。こんな、お前が苦しい時に困らせるようなこと言って……忘れて。今話したことは」

「っ……わ、忘れろって……そんなの……！」

龍星はごまかすように視線を逸らし、凧の肩にそっと布団をかける。

「卑怯でごめんな。とにかく俺は、お前が苦しい時に一番そばに居て、守ってやりたいって……そう思ってる。それだけ、覚えててくれたらいいから」